

東日本大震災の地へ その1

突然の大地震と直後の津波で大勢の人が帰らぬ人となった。そして福島では原発付近の住民が現代の難民となって追われる。日常生活が断絶し、それまでの幸せがもろく崩れてしまった。それが震災で起きた凄惨な現実だった。

とても他人事とは思えなかった。その苦しみを軽いものにしたい。その痛みを少しでも分かち合いたい。と思うと、自分に何かできないかと考えが及ぶ。震災でのボランティアは95年の『阪神大震災』で、すでに経験済みだった。今回、出かけることにためらいはなかった。

遠野(とおの)へ向かう

2011年4月中旬、ネット上には各地のボランティアセンター(以下 VC と書く)からの情報が入り始めた。そこを探し、個人で行ける場所として最終的に選んだのが岩手県遠野市に開設された「遠野まごころネット」という受け入れ先だった。

ここを選んだ理由は、岩手で唯一個人でのボランティアを受け容れていたこと。仕事の内容が大体事前にわかる解説が示されていたこと。VC が鉄道でアクセスできる遠野駅から徒歩で行ける場所にあったこと。その遠野行きに必要な東北新幹線が、すでに復旧していた点などだ。

事前の準備として、VC から言われていたのは、現地での食事などは自前で用意する自己完結型の行動をとること。ボランティア保険に加入を済ませておくこと。長靴など分厚い靴を持っていくが、その靴底に、「踏み抜き防止インソール」を用意することなどだった。被災地での瓦礫(がれき)の片づけの際、釘を

踏んでしまう事故が多発していた。その予防用だった。しかし、「インソール」は首都圏の大半のホームセンターで売り切れており、現地頼みでの出発となった。



まごころネットの拠点となった福祉センター

出発日は5月20日(金)の午後、期間は22日(日)夜までを予定した。ボランティア保険は、結局出発直前に北区社会福祉協議会のボランティアプラザで加入した。「気をつけて行ってらっしゃい」との担当者の言葉が嬉しかった。

その晩、現地に入った。大宮からの新幹線で新花巻まで3時間と少し。そこから釜石線で1時間。夜8時前に駅に着いた。徒歩でVC手前の大型スーパー「アクティー」へ。ここで買い出しをする。遠野は津波で大きな被害を受けた沿岸部まで40km、被災地らしいおもかげは見たとろほとんど残っていない。民話の故郷として有名な地方都市の日常が、そこにはあった。

「遠野まごころネット」に、門限ギリギリの夜9時前に着く。この日は200人近いボランティアが集い、本来は社会福祉協議会のセンターである建物内はごった返していた。すでに野外に洗面台、そしてシャワールームまで備え、本格的なVCとなっていた。そこで

「インソール」を借り出すことができ、後は大きな体育館の床に持参の寝袋を広げ、寝入ることになった。避難者と同じ体験と言えるかもしれない。朝6時が起床時間。それ以前に起きた人は物音を立てぬよう強く言われた。VCの組織運営には、阪神での避難所運営などでの経験が生きていた。6時起床の厳守は、連泊で疲れ切った宿泊者に、睡眠時間を保障するものだった。女性には、ついたてで仕切られた一角のほかに、大きな和室も用意されていた。

朝が来た。あいにく雨降りだった。決行か否かの判断は、朝7時半の朝礼直前まで延ばされた。幸い沿岸部の天気回復が見込まれ、ゴーサインが出た。この日の支援先は、陸前高田市と大槌(おおづち)町の2か所だった。その二つに挟まれた釜石市からの依頼は、この日はなかった。高田より近い大槌の列に並ぶ。そしてバスに分乗する。片道1時間の山越えで被災地に入る。山道にはつつじや山桜が花を咲かせ、美しかった。車窓が一変したのは、大槌町に入る手前、釜石市の鶴住居(うのすまい)町に到達した時だった。

津波の被災地へ

釜石市北部の鶴住居町と大槌町の位置



県道が鶴住居川を渡るところで、それまで淡い緑がおおっていた田畑が茶色に変わり、瓦礫がそこかしこにかき集められ、山となっていた。バスに乗っていた皆から私語が消え、思わず息をのむ。海岸から3km。県道をまたぐ橋が津波の勢いをそいだのだろう。ここが津波の先端になったようだ。バスはそのまま海へ向けて走る。すぐ左手には伝統的な木造家屋だろう、その平屋が津波の勢いで半分はがされ流れ、残りの室内が露出していた。にもかかわらず、その先の新築住宅は外観がほとんど無傷で、避難所から帰宅した人が再建に向け庭を片付けていた。

三陸沿いを走る国道45号線に出て、そこを北上し沿岸部に行く。ここでは瓦礫以外に見るものはなく、海側を並行して走っていたはずのJR山田線の線路跡はそのレールばかりか築堤の一部まで崩れ、わずかに鉄道の痕跡をとどめるだけだった。思わず絶句する。直ぐにトンネルを抜け、大槌の町に入る。あの町長が役場で津波に呑まれた激甚災害の地だ。右手の沿岸部は瓦礫ばかりで、「シーサイドタウン」と呼ぶ大きなモールがあったはずの場所も、むき出しの鉄骨が目立つ程度で半壊の状態だった。直ぐに左折して、小槌と呼ばれる地区に入る。こちらは住宅街で多くの建物が外見上は被害を受けず残っていた。その一角、放置された「大槌保育園」の前庭にバスは到着。遠野からの他のバスもここに来て、我々を下した。出発前に作っていた8人グループで、他と別れて徒歩で移動。少し内陸の道路から南に入った河辺さんのお宅を訪ねた。班長の中島君の下に、敷地をおおう乾いたヘドロをシャベルで取り除き、土のう袋に詰めて巡回に来る軽トラックに載せる。これがこの日の仕事だった。土のうと聞いて、腰を痛めないように気をつけた。昨夏、自宅の庭にホームセンターで買った砂利を持ち込んだ

経験があった。セルフサービスで自分で詰めたため、これが重く大変な労働であることは承知していた。袋に控えめに、乾いたヘドロを入れて運ぶ。おかげで腰を痛めずに済んだ。

グループの8人は、親子で参加した人、茨城から来て今日で4日目だという大工さん。バイクでのツーリングが趣味でここにもバイクでという青年。若い頃「小田原地震」に遭い、それを思い出すという初老の人。静岡で料理屋の厨房に立ち、三陸の海産物を扱うというおじさん。そうした面々は明るい気性の人が多く、終始元気の良い声がとびかった。無駄のない動きで、初めてなのに仕事は結構はかどった。



大槌町 陸に上がった遊覧船

連日の作業で疲れている班長の中島君が早め早めに休憩を入れる。おかげで昼も12時前に声がかかった。笑顔で出てきたこの家の主人河辺さんが、復旧した水道に案内し食事の前に手を洗う。「大槌の水はうまい」と河辺さん。確かにこれはうまかった。青年の一人が津波はどこまで来たんですかと聞く。モルタル壁の身長位の高さをさした。そこにうっすらと水平な線が走る。この高さまで津波が来たら住めないはずで、最初の十日間は山の手の避難所暮らしたという。それから畳を干し、流れ込んだ土砂をボランティアの手も借りながら取り除き、ようやく住めるようになったのが最近のことだという。しかし庭に

はまだたくさんのヘドロが残る。我々を頼りにしていた。

午後3時前、まだまだ体力は残っていたが、班長から片づけの支持が出た。小田原からの人が慣れた手つきでヘドロを除去した庭に消毒用の石灰をまき終えたところだった。水道で道具を洗い、河辺さん夫妻にあいさつし(もちろん感謝もされ)、けさの保育園まで引き上げた。河辺邸での作業はもう一日必要だった。明日も来ようと思ひ帰路についた。

帰り道、バスはけさと同じ釜石市鶴住居の市街地を抜ける。一面の瓦礫の荒野に、コンビニのF社の移動販売車が2台道沿いに並び、店を開いていた。マスク姿の店員が車を背に、客待ちしている。「たばこあります」という看板が目立った。基礎しか残らぬ家々の中で時たま1階の床がはがれずに残っている場所がある。その一つに老人と幼子がいて、椅子を囲んで談笑する姿を遠目にした。窓をしめている車内からは、その声も聞こえない。不思議な光景に何かシュール(非現実的)なものを感じた。

外国人の参加

ところでバスに乗り合わせた隣のグループには、アメリカからの3人、オーストラリアからの1人など、元気の良い外国人たちがいた。帰りの峠道の手前、行きにも休憩した「どんぐり広場」で、アメリカ人のリーダー格だったミュージック(Musick)氏と話した。彼はいかにもアメリカ人らしく、世界中の被災地でボランティア活動を行うNGOの先導役だった。これから7月にかけて、1週間単位で数人ずつテキサスからボランティアを送り込む。その派遣先を選定するために大槌に来たという。精悍な顔つきが印象に残った。

彼の名刺には、GLOBAL SAMARITAN RESOURCESという団体名があった。サマリタンは聖書に

ある旅人を助けた「善きサマリア人」を表すのだろう。後で調べてみると、テキサス州のアビリーン市に本拠を置き、周辺の大学や教会関係者を対象にボランティアを募(つ)り派遣している組織だった。

それにしても、今度の震災は、阪神までと違い、海外の民間人までがボランティアに参加する時代を迎えていると、つくづく感心させられる。VC では他にも韓国人の女性に出会い、遠くドイツから来た重装備の青年にもあった。

地震が起きて間もなく、NHK から流れた仙台市南部の津波の映像は、そのままアメリカの朝のニュースで放映された。そして欧州の晩のニュース番組にも使われた。その音もたえずに津波が大地を飲み込んでいく映像は、「黙示録」的な終末の印象さえ与えた。そこに戦慄(せんりつ)するものを見て、この極東の島国への同情と共感をもった多くの人がいかに違いない。

平泉経由での帰京

VC に戻ると、ちょうど午後4時半だった。これで迷いが消えた。明日日曜の活動に参加する場合、この時間に戻って来られないと帰りの新幹線に乗り継げないことがわかっていた。遅ければ、中途半端だが今日そのまま帰京することも考えていた。それをせずに済んだ。午後5時半のミーティングが終わると、10時の消灯までやることもなく退屈する。唯一の楽しみは、班長の中島君おすすめの遠野名物のそばを、町の食堂に食べに行くことくらいだった。ラウンジらしきものもないVCで、お湯が出てお茶が飲める受付脇の小空間が自分の居場所だった。そこでは地元の新聞「岩手日報」が読めた。時おり昼間のバスで一緒だったJICA(国際協力機構)のスタッフとすれ違った。JICAはこのVCに参画する法

人・団体の一つで、小規模ながらスタッフを数人常駐させていた。そこから大槌の避難所に通っていた。

昨日と大体同じ場所に寝袋を敷き、眠りにつく。ところがシャワーの切り上げを急かされたせいか、体の疲労感に微妙なものを感じた。そのまま熟睡できないまま朝を迎えることになった。そして朝、昨日と同じ雨降りを迎えた。何とこの日は、ボランティア派遣を見合わせるという判断が出た。十日ぶりのこと。こうして私のたった一日のボランティア派遣は実質終了した。

その日は昼前の列車で遠野を立ち、花巻・北上と乗り継ぎ、世界遺産登録間近の平泉を訪ね、毛越寺を見学し、再度の訪問を思いながら岩手を後にした。時間をさける夏にまた行くことを誓って・・・。

了



平泉町 毛越寺の浄土庭園

追伸 「遠野まごころネット」については、『週刊 東洋経済』2011年5月14日号に詳細がある。また現在も維持されている活動については、公式ホームページ(<http://tonomagokoro.net/>)で知ることができる。